モノグラフ

飛行祈願
―機械文明と呪具舞踏―

近藤 雅樹（こんどう まさき）
本館民族文化研究部

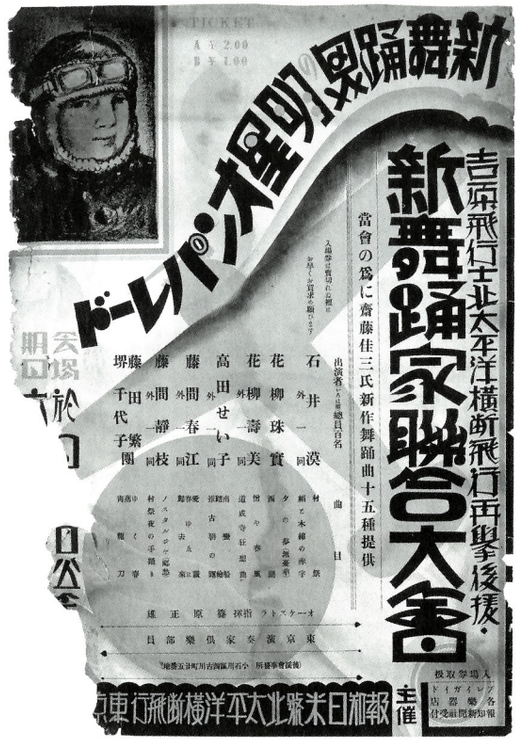
民族学の父、渋沢敬三が主宰した組織が収集した民具の調査中、偶然「飛行祈願文」と、関連する祈祷札類の束を見つけた。機械文明の先端をいく飛行機と伝統的な呪具。その奇妙なとりあわせがずっと気になっていた。今回、偶然が重なり各地で見出した関連資料によりこの一文を呈する。

昭和六（一九三一）年二月一一日、報知新聞社が主催して、同年の春に太平洋横断飛行に挑戦すると公表した。そして、同社内に寺田四郎副社長を委員長とする「横断飛行実行委員会」を設置した。

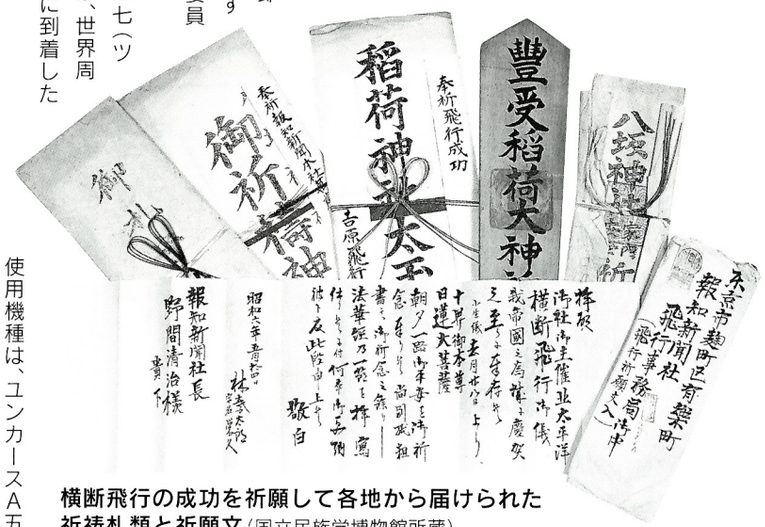
飛行船LZ一二七（ツェッペリン伯号）が、世界周航の途中に霞ヶ浦に到着したのが、約一年半前。

実用化されてまだ間もない飛行機による、この壮大な計画が成功すれば、日本人による初の快挙となる。

飛行計画の詳細は、翌日の『報知新聞』（夕刊）第一面の、ほぼ全面を使って紹介された。左頁の地図は、同紙に紹介された飛行計画経路である。東京の羽田沖から「桑港」つまりサンフランシスコまでの総飛行距離は、一万二一〇キロメートルとも表明された。



「吉原飛行士北太平洋横断　再挙後援　新舞踏家連合大会」ポスター
（東京藝術大学所蔵）
初挑戦はクリール列島の中間地点で頓挫したが、報知新聞社は予備の同型機も同時購入していた。吉原飛行士による不時着地点からの再挑戦に寄せる国民の期待は大きかった



横断飛行の成功を祈願して各地から届けられた祈祷札類と祈願文（国立民族学博物館所蔵）
日本人初の挑戦に意気高揚し、全国各地から報知新聞社内の事務局に届けられた祈祷札類の一部。封書（H27655）は宇都宮在住の林孝太郎から届いた。日蓮大菩薩に日夜横断成功を祈願していると披瀝（ひれき）した書状に「法華経」の一節の写経がそえてあった
（左よりH26036、H26038、H26039、H26046、H26049、H27655）＊収集年不明

使用機種は、ユンカースA五〇型ユニオール。単発・単葉二人乗りの水陸交替式軽飛行機だった。全金属製だが、掲載写真で明らかなとおり、乗員席はオープンで、風防設備はないに等しい。しかも、さらに軽量化をはかるため単座式に改造し、単独飛行を決行するというのである。

この計画に対して、時の日本政府は、一万円の国庫補助を与えた。全国各地からも、さまざまな団体や個人からの寄付金提供が相次いだ。なかには小学生からの寄付金もあったという。

この過酷な横断飛行に挑戦する操縦士には、同社専属の吉原清治（よしはらせいじ）一等飛行士が選ばれた。彼は、前年八月にやはり報知新聞社が主催した「日独親善欧亜連絡大飛行」に起用され、ベルリン―立川間をシベリア経由で飛来することに成功していた。そのときの飛行距離は、一万一〇九六キロメートル、所要飛行時間は八〇時間だった。その実績を買われての選抜だから、当然、国民の期待は大きかった。

北太平洋横断飛行の試みは、吉原機が初めてではない。欧米人によって何度も試みられていた。そして、日本側からの出発地点は、多くの場合、青森県三沢市周辺が選ばれていた。しかし、これまで日本から発進して成功した例はなかった。

吉原機の飛行計画路とは逆のコースをたどり、来日した飛行機はあった。大正一三（一九二四）年に、アメリカ海軍のスミス中尉らが搭乗してサンタモニカ飛行場を発進したダグラス社製四機のうち三機が霞ヶ浦に飛来したのである。太平洋横断飛行計画をトップ記事で報道した一二日の『報知新聞』も、彼らは三月一七日に出発し、五月二二日に飛来したと紹介していた。なんと、六七日間をかけての大遠征だったのだ。

もっとも、実際に彼らが要した飛行時間は、約八四時間だったという。しかも、四〇〇馬力のエンジンを搭載していた。対するに吉原機は八〇馬力というのだから、この横断飛行は無謀に思えるのだが、当時の日本国内はわきかえっていた。

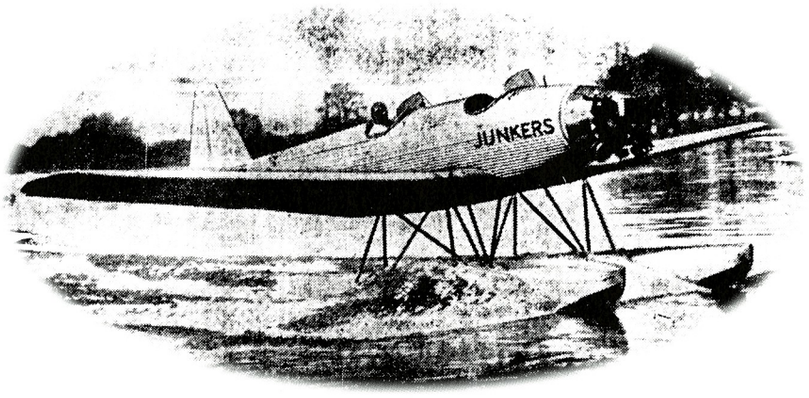
五月四日の朝は好天に恵まれ、大勢が参集した。そして、JOAKが実況放送するなか、声援の大合唱に送られ発進離水。やがて、機影は碧空（きくう）の彼方へと消えた。

羽田・根室間の飛行は順調だった。しかし、その先は悪天候とエンジントラブルのため飛行は難航した。それでも一四日にウルップ（得撫）島とチリホイ（知理保以）島を越えた。しかし…。

そこまでだった。

濃霧を避けて高度三〇〇〇メートルを維持していたら、突然、エンジンが停止してしまったのだ。やむなく滑空降下してシムシル（新知）島沖に着水した。

損傷した機体で漂流すること約七時間、幸い、吉原飛行士は無事に救助された。



「北太平洋横断飛行図」と「ユンカースA50ユニオール」
（昭和6年2月12日発行の『報知新聞』夕刊より）
諸所で着水給油しながらバンクーバーに達し、陸上発着機に改造してサンフランシスコを目指す計画だった。飛行時間は約77時間と想定。同型機の写真も公開された。一週間後、横浜に揚陸された同機は、小泉又次郎逓信大臣により「報知日米号」と命名された

羽田に集まった観衆の声援にこたえる機上の吉原清治一等飛行士
（CHARLES SCHWARTZ LTD PHOTOGRAPHY 所蔵
http://www.cs-photo.com/ より）
燃料輸送と機体の整備に備えて、報知新聞社は「第百国際丸」（約260トン）をベトロパブロフスクに派遣するなど周到に準備して挑んだ。しかし、見出し中に躍っていた「年中濃霧消えやらぬ世界第一の魔の空」で、吉原機は翻弄され続けた